

I. 話の概要 — はじめに

おはようございます。このようにして講壇に立つのは久しぶりですが、皆さんと共に神のみことばに目を向けることができることは、本当に光栄であり、祝福です。ここ数ヶ月、私たちは「神の偉大さ」という説教シリーズを進めてきました。

私たちは、神の「力」「知恵」「栄光」「愛」「あわれみ」「恵み」「忍耐」「救い」「御国」といったご性質を通して、神の偉大さを学んできました。

今日はその締めくくりとして、紀元前 586 年頃、バビロニア人によるエルサレムの陥落後に書かれたと考えられている『哀歌』を著した旧約聖書の詩人の視点を通して、神の偉大さと「忠実さ」というご性質について見ていきます。

『哀歌』は、バビロニア人によるエルサレムと神殿の悲劇的な破壊を嘆く、5 つの詩的な哀歌を集めたものです。著者は匿名ですが、伝統的には預言者エレミヤのものとされています。この書は、激しい悲しみ、罪がもたらす厳しい結果、そして神の変わらな忠実さとの葛藤を描いています。5 つの詩から成り、バビロニアによるエルサレム包囲、それに続く破壊と追放を生き延び、振り返っている著者の言葉が記されています。この出来事は列王記第二 24～25 章に描かれています。『哀歌』は、破壊後にイスラエル人が経験した苦痛と混乱を記憶に留める記録なのです。

『哀歌』に収められた 5 つの詩の構成は、非常に意図的なものであり、この書のメッセージの一部を成しています。第 1 章から第 4 章までは、アクロスティク（アルファベット詩）で構成されており、各節は 22 文字からなるヘブライ語のアルファベットの異なる文字で始まります。この詩的構造は、苦しみにある人々の感情に秩序をもたらす表現となっています。『哀歌』は、悲しみ、絶望、罪の結果といった人生の現実を受け入れることと、神と共に生きる希望や喜びとの間で、緊張感に満ちた書物です。

私たち自身の生活においても、こうした必要性、助けを求める叫びがあります。人生の苦難が耐え難いほどに重くのしかかる日もあります。なぜ愛する人は亡くなってしまったのか？なぜ私には仕事を与えられないのか？なぜ私は病気なのか？なぜ友人は私を裏切ったのか？なぜ私の夢は上手くいかないのか？神はどこにおられるのか？朝、重苦しい気持ちで目を覚まし、ため息をつき、心は答えよりも疑問でいっぱいになっていることがあります。鏡を見つめながら、「この状況はいつか変わるのだろうか？私はこの試練を乗り越えられるのだろうか？」と問いかけます。もし今日のあなたがそのような状態に置かれているなら、あなたは決して一人ではありません。聖書は、このような日々から目を背けません。聖書は、私たちの心の痛みにまっすぐに語りかけ、灰の中に座り悲しむ私たちと共にいてくださるのです。

『哀歌』は、私たちを神とのそのような率直な対話へと導いてくれます。著者は、荒廃した街から立ち上る煙を目の当たりにしていました。しかし、その深い悲しみの真っ只中でさえ、希望を求めて叫びました。どのようにしてでしょうか？神がどのようなお方であるかを思い出し、神のあわれみに身を委ね、何も変わっていないように見える時でも、静かな信頼をもって待ち続けることによってです。これこそが、あなたが今日必要としている恵みではないでしょうか？

では、疲れ果てた心にどう対応すればよいのでしょうか？自分の痛みについて神に正直に語りましょう。神の時が私たちの期待より遅く感じられるときにも、静かな信頼を保ちましょう。人生の痛み、悲しみ、失望、その多くは、私たち自身が神との契約を破ったことに起因するものですが、そのさなかでも、神が御自身のあわれみと忠実さをもって、私たちを見捨ててはおられないことを知り、神を待ち望むのです。

II. 要点は何か？ — 忠実さ

哀歌 3:19-26

- 19 私の苦しみとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。
20 私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。
21 私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。
22 主の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。
23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は偉大です。
24 主こそ、私への割り当てです」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。
25 主はいつくしみ深い。主に望みを置く者、主を求めるたましいに。
26 主の救いを静まって待ち望むのは良い。

この箇所を詳しく見ていきましょう。そして、この箇所を読み解く中で、人生の葛藤や、希望、喜び、悲しみ、そして痛みを感じ取ってみましょう。

- 19 私の苦しみとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。
20 私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。
21 私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。

聖書において、「胆汁（gall）」とは、極めて苦く、有害、あるいは有毒なものを表す比喩的かつ文字通りの用語です。これは、動物の胆汁、毒液、あるいは特定の苦味のある植物（よもぎやドクニンジンなど）を指します。よもぎは、苦しみ、悲しみ、そして罪がもたらす痛ましい結果を象徴する比喩として用いられます。苦味のある砂漠の低木（アルテシヤ）に由来し、しばしば「胆汁」（毒）と結びつけられ、神の裁きや、義から背を向けたことによる悲劇的な結末を象徴しています。

正直に思い出すことは、ありのままの言葉を語る真実から始まります。私たちは、辛かった出来事に心を向けます。心に抱えているものを神に打ち明けます。その痛みを素通りしたりはしません。心が日々抱えている事実を語ります。そこに癒やしの始まりがあります。祈りに重みが生まれます。そして、私たちが神の忠実さに目を向け始めることができるのです。

『哀歌』、特に 3 章は、そのような切なる願いと祈りの型を私たちに示しています。著者はその痛みを名指して語ります。喪失、苦々しさ、そして消え去らない痛みを思い起こします。彼は、自分のたましいがそれらの記憶を留め、その重みに深く頭を垂れていると述べています。それこそが正直さです。それこそが、率直に語る信仰です。信仰は顔を隠しません。信仰は、物語のすべてを神の御手の光の中にさらけ出すのです。

このように思い出すとき、あなたは神に、現実の場所であなたと出会ってくださるよう求めているのです。あなたは砕けた破片をテーブルの上に並べます。そして、「ご覧ください」と言います。それらを押しやったりはしません。自分自身では与えられない助けを求めます。悲しみに身を委ね、謙虚になるのです。ヘリくだった心は開かれています。ヘリくだった心は受け入れることができます。この「人生という庭」の中で、希望と信仰が育まれていくのです。

このように思い出すのは、正直な祈りです。それはため息のように聞こえます。涙のように感じられます。言葉が尽きたとき、それはささやきのように聞こえます。神はその声を聞いておられます。神はそのような真実を尊ばれます。そしてその場所で、たましいはもう一度教えることができるほどの静けさを取り戻すのです。

この箇所、流れを変える一節があります。「21 私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。」痛みは依然として存在しています。それでも、心は選択をします。別の何かを前面に呼び出すのです。神についての真実へと手を伸ばすのです。悲しみを消し去るわけではありません。悲しみの隣に新たな考えを添えるのです。その心は両方を抱きしめます。

思い返すことには練習が必要です。それは、心の中に二つの席を設けるようなものです。一つの椅子は悲しみを受け止めます。もう一つの椅子は、神が語られた約束と、神の深い忠実さを受け止めます。あなたは両方の椅子に腰かけます。そして時間が経つにつれ、より力強い声が聞こえてきます。神のささやきは、よりはっきりと聞こえるようになり、神の約束があなたを安定させ始めます。希望が戻ってくるのです。

次の部分では、神の真実についてより明確に描かれています。

22 主の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。

23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は大偉です。

24 主こそ、私への割り当てです」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。

語彙解説：異なる言語から英語へ翻訳することには難しさが伴いますが、ヘブライ語から英語への翻訳も例外ではありません。22 節の「大きな愛 (great love : 英語訳)」という表現は、曖昧になりがちなこの英語の表現以上の意味を持っています。ヘブライ語の語は「אֶהֱבָה (ヘセド)」です。この用語は、しばしば「憐れみ」や「揺るぎない愛」、あるいは「主のあわれみ」と訳されます。ヘセドは、愛、忠誠、そして契約への忠実さを結びつけるものです。それは献身を伴う愛情であり、時を超えて約束を守り続ける慈しみです。この概念は関係性という側面を深く帯びており、神が御自分の民と結ばれた契約を想起させます。

「23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は大偉です。」朝ごとに、神はあなたの玄関先にあわれみを置いてくださいます。あなたは疲れ、涙を流し、もう諦めてしまいたい気持ちになるかもしれませんが、神のあわれみは時計の針のように確実に訪れ続けます。あなたは苦いよもぎや胆汁の味が口に残っているかもしれませんが、神の恵みは、今日を生き抜くのに十分な力強い約束とともに、あなたの口の中を洗い流し続けてくれます。

「朝」という言葉は、希望に形を与えてくれます。朝はありふれたものです。それは絶えず訪れます。この聖句は、そのありふれた時間とあわれみを結びつけています。ここに静かな贈り物があります。あなたが太陽を昇らせる必要はありません。一日を無理やり作り出す必要はありません。朝が訪れ、それとともに、あなたがこれから向き合うその日にふさわしいあわれみがもたらされるのです。

真理を実践するにつれて、希望は育まれます。心は神の配慮の証拠を集めます。たましいは新しい反射神経を身につけます。悲しみは先に声を上げます。真理はより長く語り続けます。その日はすぐには変わらないかもしれませんが、しかし、あなたの足取りは変わります。あなたは神からの言葉を手に、そこに立っています。その言葉をしっかりと握りしめ、息を吸います。

ある朝はゆっくりと過ぎ、ある朝は重く感じられます。この聖句は、あなたに明るさを作り出すよう求めているわけではありません。ただ、神がなされていることを述べているだけです。神は再び御手を開かれます。神は気遣いと忍耐をもってそうなさいます。たましい

いが「主はすでに私に必要なものを備えてくださっている」という言葉で一日を迎えることを学ぶとき、希望は確かなものとなります。

そして大胆な告白が続きます。「24 主こそ、私への割り当てです」割り当てとは十分であることを意味します。割り当てとは、約束によってあなたに与えられたもののことです。それ以外のものはすべて変わり得ます。しかし、神は変わることがありません。神こそ、誰にも奪うことのできない割り当てです。神こそ、あなたがどの部屋へでも持ち運べる遺産です。神こそ、課税もされず、盗まれることもなく、尽きることもない供給源です。

III. 問題は何か？—待つことは難しい

この箇所は、探し求めることと待つことについても語っています。神は、御自身を求める者たちにいつくしみ深いとあります。また、静かに神の救いを待つことは良いことだとあります。静かに待つということは、何もしないということではありません。それは、慎ましい歩みを守りながら、揺るぎない信頼を保つことを意味します。あなたは祈ります。手元にあるもので働きます。休むべき時には休みます。従順と平安の小さな輪を守り続けます。

25 主はいつくしみ深い。主に望みを置く者、主を求めるたましいに。

26 主の救いを静まって待ち望むのは良い。

次の部分では、私たちの目を神の御心に向けさせます。神の揺るぎない愛と約束は、私たちに錨を与えてくれます。神の優しい気遣いは尽きることはありません。今日必要なものは備えられています。明日も備えがあります。目を覚ますと、新たな助けがあります。眠るとき、あなたは抱かしめられています。これは単なる希望的観測ではありません。これは、神を求める者たちのために、神が御自分の民と共になさってこられたことの記録なのです。

私は「静まって待つ」という表現が好きです。静かに待つことは、あなたの心を落ち着かせます。雑音を削ぎ落とします。神がペースを導いてくださるのです。何も無理に押し進める必要はありません。あらゆる計画を追い求める必要ありません。ただ神に必要なを委ねます。神が応えてくださるよう余地を残します。時には、立ち続ける力という答えが与えられます。時には、自分では見つけられなかった道という答えが与えられます。時には、友人を通した助けという答えが与えられます。神は、何を、いつ送るべきかをご存知です。「良い」という言葉が繰り返し使われています。地図が破れかけた時、この言葉は地図を修復してくれます。「良い」とは、早いという意味ではありません。「良い」とは、痛みがないという意味でもありません。「良い」とは、神が御自身に向き合う人々に対して、御自身の親切さを積極的に示してくださることを意味します。

「求める」と「待つ」という、並置された言葉の詩情と緊張感に注目してください。「求める」とは、神に向き合い、神へと歩み寄ることです。「待つ」とは、神のタイミングに合わせて歩むことです。心は静まり返っていますが、眠っているわけではありません。この節には「静まって」という言葉が付け加えられています。ここでの「静けさ」には重みがあります。人生の喧騒という活動は現実のものですが、たましいは主の前で揺るぎない静寂を選びます。救いは主のもです。私たちが求めれば、主は与えてくださいますが、主の定められた時に与えてくださいます。

また、あわれみが時間そのものを安定させるという側面もあります。26 節は「主の救い」を待つことについて語っています。ここでの救いとは、神の御名をたたえる救いです。それは主の御業であり、主の道であり、主のタイミングなのです。静けさは切望を消し去るものではありません。神の御前で切望を誠実なものとして保つのです。

この節にある静寂は、空虚なものではありません。それは期待に満ちています。静かな心は、助けの小さなしるしに気づくことができます。静かな心は、長い時間乗り越える力を受け取ることができます。希望がここに錨を降ろすのは、救い主である主に焦点が向けられたままであるからです。静かな信頼は単純に聞こえるかもしれませんが、それは深い強さを形作ります。私たちは内なる騒音を静め、神の揺るぎない配慮にすがり、神の導きを求めるのです。

IV. その違いとは？

この聖句が私たちの生活にもたらす違いは、私たちがどのような悲しみや挫折を経験していても、その中で神の忠実さを知ることができるという点です。人生は厳しいものであり、様々な状況、時には自分自身の事情によって、絶望的な状況に追い込まれることもあります。愛する人の死、経済的な苦境、就職や入学の応募結果が期待外れだったこと。がんやその他の病気。そうした時こそ、私たちはなおさら神を求める必要があります。神はそこにいらっしゃいますが、私たちの人生において物事を変え、私たち自身を変えていく神の忠実さを見出すためには、自らの信仰をもって神のもとへ歩み寄りなければなりません。

私自身の人生において、困難な時期には父のことを思い出します。

「平静の祈り」神学者ラインホルド・ニーバーによって書かれた「平静の祈り」は、平安と物事の見方を得るための力強い祈りです。神よ、私に平静さをお与えください。変えることのできないものを平静に受け入れる力を与えてください。変えるべきものを変える勇気を、そして、変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えてください。

しかし、具体的には、この緊張とストレスに満ちた時期を、どのように乗り越えていけばよいのでしょうか？神が遠く感じられるとき、どうすれば神に近づくことができるのでしょうか？

時間をかけて神について考え、祈り、信仰と神の忠実さによって困難を乗り越えていきましょう。「2行の祈り」という方法を活用しましょう。1行目には、心配事を一文で書き出し、2行目には、それを神様に委ねる一文を記します。「主よ、私には道が見えません。主よ、今日という日をあなたに委ねます。」

神様の忠実さを求めるこの過程を助ける方法があります。神様を求める時間を確保しましょう。聖書の言葉を声に出して朗読しましょう。カードに一句書き留め、手元に置いておきましょう。今日、心に留めようと決めたことを友人に話してみてください。忍耐は、小さくも着実な従順の行いを通して成熟していきます。毎日の簡単なルールを決めましょう。聖書を読んだり祈ったりする時間を決める。タスクを一つ完了する。誰か一人を励ます。そして、少し休む。目標は低く設定し、定期的に続けて習慣づけましょう。習慣に関する研究によると、シンプルで繰り返せる行動は、一時の努力よりも長く続き、私たちが望むものを徐々に形作っていくのです。絶望が「諦めろ」とか「急げ」と迫ってきたら、冷静な忠実さで応えてください。一本の電話に折り返し連絡をする。流しにたまった食器を片付ける。メールを一通送る。少し散歩に出る。神と共に歩むことは、霧を払いのけてくれます。その場に立ち、小さなことを行い、それを神に捧げましょう。

「祈りの役割は、神に影響を与えることではなく、むしろ祈る者の本質を変えることにある。」 ソレン・キルケゴール

神の忠実さを見出すためには、私たち自身の信仰が成長する必要があります。そうすることで、神の偉大で揺るぎない愛「ヘセド」への認識が、より現実的なものとなっていくのです。神の尽きることのないあわれみは、痛みの中で私たちに寄り添い、最も厳しい時期であっても、率直な祈り、新たな希望、そして静かな信頼へと私たちを招いてくださいます。神は忠実なお方です。私たちもまた、忠実でありましょう。